

2022年4月に小樽商科大学、帯広畜産大学、北見工業大学が経営統合し、北海道国立大学機構が発足した。三大学のキャンパス間の総移動距離は700kmを超え、まさしく広大な北海道における広域の大学経営統合となったが、同機構の発足と同時に、地域課題解決、イノベーションの創出を目指して分野融合型共同研究やスタートアップ創出などの社会実装を推進するオープンイノベーションセンター(通称ACE「エース」)も始動している。本稿では、ACEセンター長の川口貴之氏が現状と今後について語る。インタビューはACEビジネス開発部門長の北川泰治郎氏が行った。



国立大学法人北海道国立大学機構オープンイノベーションセンター(ACE)は、帯広畜産大学(Agriculture:農学)、小樽商科大学(Commerce:商学)、北見工業大学(Engineering:工学)が連携し、商農工融合による研究成果の社会実装を通じて、北海道地域の持続的発展に貢献することを目的として発足した組織です。産業界/現場の皆さまが抱える様々な課題について、商農工融合による学術研究の観点から、共に解決策を探りますので、ご相談・ご要望は、北海道国立大学機構ワンストップ窓口までお寄せください。



ワンストップ窓口

北海道国立大学機構

魅力的なプロジェクトも誕生してきた



かわぐち・たかゆき
川口 貴之

国立大学法人北海道国立大学機構
北見工業大学 副学長
同機構 オープンイノベーションセンター長

1973年生まれ。札幌南高、北大工学部卒業。同大学院土木工学専攻博士前期課程修了。専門は地盤工学。博士(工学)。函館高専准教授を経て、2011年北見工業大学に着任、2019年から同大教授、2022年から同大副学長、2024年から現職。

北川 教授(以下、北川) オープンイノベーションセンター(以下、ACE)が設立されてもうすぐ丸4年となりますが、これまでの活動をどう振り返りますか？

川口 教授(以下、川口) 協力頂いている皆様のお力添えもあって、北海道の課題解決のためにACEがやれることや、やらなければならぬことが少しづつ明らかとなり、下地が整ってきたように感じています。

北川 従来も各大学は地域課題を意識して取り組んできたと思いますが、経営統合前と何が違いますか？

川口 これまで各大学はそれぞれの専門性を生かし、基本的には課題解決に至るプロセスの一部分を担ってきたと思います。しかし、統合したことで、それぞれの専門性を生かし、現状の分析から科学技術を用いた解決策の提案、そして社会実装・収益化に導くまでを一貫して支援しているようになったことが最も大きな違いではないかと思えます。

北川 たしかに、三大学の専門領域は異なりますので、研究者同士の議論の幅はより広くなり、多角的に問題を話し合えると思います。ではその研究者同士の交流についてはどのように取り組んでいるのでしょうか？

川口 三大学教員が参加する交流会の開催、互いの大学を訪れるための旅費支援、分野融合型プロジェクトに対する研究費支援など、地道な支援を続けてきました。

北川 実際に様々なテーマでプロジェクトが生まれており、三大学のどの分野とどの分野がコラボレーションできるか見えてつづつあります。

川口 はい。雲海などの特異な自然現象の予測技術を観光に生かす「ZEEKERプロジェクト」や最新の計測技術やAIを用いて本来の価値を適正に評価することを旨とする「道内広葉樹の資源管理プロジェクト」、更には動物生態と交通工学の専門家が連携してロードキルを減らすことを目指す取り組みや、かつてオホーツク地域を支えたハツカの生態に着目し、他の芳香作物や生薬栽培によって再び地域産業化を目指すプロジェクトなど、魅力的なプロジェクトが誕生してきました。

北川 このようなプロジェクトがモデルケースになれば、それを参考に新たなコラボレーションの形が見えてきますし、掛け合わせることでの相乗効果も期待できますね。



きたがわ・たいじろう
北川 泰治郎

国立大学法人北海道国立大学機構
小樽商科大学
グローバル戦略推進センター
産学官連携推進部門 副部門長・教授
同機構 オープンイノベーションセンター
ビジネス開発部門長

1975年生まれ。札幌西高、小樽商大卒業。株式会社日立製作所入社、同大学院アソシエイト・プレナント・シニア専攻修了、日本オラル株式会社へ転職、同大ビジネス創造センター副センター長などをを経て2025年から現職。



北川 さて、これからの抱負についてですが、北海道でイノベーションを活性化させるためにはこれまで以上に他大学や民間企業、自治体、金融機関などとの連携強化を図るべきだと思いますが、今後のACEとしての重点方針についてお聞かせください。

川口 なにより先ほど申し上げたような活動やプロジェクトをできるだけ多くの方に広く知ってもらうための発信を強化したいと考えています。

北川 私はたとえ北海道の地域課題解決であっても、海外とのつながりを意識しておく必要があると思っています。そのためにも、ACEは常にどこに対しても開かれ、携わる人々の意識も常にオープンでなければなりません。

川口 そのとおりだと思います。広く議論や対話が続ける中でACEを身近に感じてもらい、最終的には世界中の皆さんと一緒に仕事をしたいと思っています。一緒に取り組んでほしいと思っています。

北川 これから他に取り組みたいことがありますか？

川口 プロジェクトを創出するコーディネーターをはじめ、先ほど述べたような研究プロジェクトを通じて未来の北海道を支えていく人材の育成にも注力していきたいと思っています。

北川 なるほど。特に次世代を担う若いコーディネーターの育成は急務です。人脈や知見などはすぐに形成されるものではないことから、長い目で育成しなければなりません。

川口 そのためには、三大学に所属する学生や職員、さらには受験を控える高校生やそのご家族にも我々の活動を知ってもらうための発信を強化し、興味のある方には、ぜひとも様々な形で我々の研究プロジェクトに参画してほしいと願っています。北海道の人口はとうとう500万人を切りましたが、こういう時代だからこそ、変化を恐れずに、やりたい未来像を築き、それに向けて力を合わせて進んでいくべきだと感じます。ACEがそのために必要なオープンイノベーションの一翼を担うべく尽力したいと思います。

一緒に仕事がしたいと思ってもらえる組織に

Agriculture × Commerce × Engineering オープンイノベーションセンターの期待と抱負

北見工業大学 教授
オホーツク農林水産工学
連携研究推進センター長

新井 博文

北見工業大学オホーツク農林水産工学連携研究推進センター(CAFFE)は、地域の農林水産資源を対象に、スマート農林水産技術の開発など産学官連携による研究を推進し、その成果を社会に還元する役割を担っています。今後ACEと協働し、研究成果の社会実装を加速させ、新産業の創出や持続的な研究基盤の強化、産学官金連携による研究支援の充実を図るとともに、国際連携や人材育成を一層進めていきます。

Profile
博士(水産学)(北海道大学)、応用化学系 教授、地域未来デザイン工学科長
山口大学医学部や米国国立衛生研究所での勤務を経て、2009年より北見工業大学に着任。

帯広畜産大学 教授
グローバルアグリデザイン
研究センター長

福田 健二

小樽商科大学、北見工業大学、帯広畜産大学には多くの知の萌芽があると確信しています。これらを短期間で社会実装するのみならず、50年後、100年後の北海道で花開かせるには、分野横断的な協働体制の構築が必須であることは論を俟たないでしょう。しかし、専門分野外の研究者や企業等のリアルタイムな活動に対し、一研究者が常に鋭敏なアンテナを張るには困難です。また、産学官金の垣根を超えた連携の実現は、研究者個人の範疇を超えます。ACEにはこれらの役割を担っていただき、三大学連携の強みを最大限に活かした取り組みを通じて、北海道に持続的あるいは破壊的イノベーションをもたらす存在となることを期待します。

Profile
博士(農学)(北海道大学)、生命・食料科学研究部門 食品科学分野 食品機能学系 教授
学位取得後、カールスバーグ研究所生化学部門で2年半ポストドクを経験し、2005年から帯広畜産大学に着任。

小樽商科大学 大学院
アントレプレナーシップ専攻 教授

藤原 健祐

北海道が直面する人口減少や地域格差の解消には、地域課題に対するソリューションとしての「知の社会実装」が最も重要と考えています。これを実現するには、産学官金を結び付け、ヒト・モノ・カネ・情報を効果的に結集・循環させることが不可欠です。ACEには、その連携を設計し加速させてプラットフォームとしての機能を期待しています。私もその一員として、社会実装型プロジェクトの企画・推進を通じて、北海道の持続可能な発展を支える存在となることを目指します。

Profile
MBA(小樽商科大学)、博士(保健科学)(北海道大学)
診療放射線技師として病院に勤務した後、技師養成校で教鞭を執る。2018年より北海道大学にて「病院経営アドミニストレーター育成拠点」の運営に携わり、2019年から小樽商科大学に着任。

